

評論

廣瀬淡窓とその世界

月旦評教育の功罪

原 千里

月旦評は、咸宜園における学業成績評である。月末に各塾生の学業成績を集計して、次の月はじめに公表。月末に公表した時もあった。

月旦評は、淡窓の三奪法の具体的な実践と解される。平等主義に裏打ちされた実力主義が貫かれていた。

塾生たちは、淡窓の思惑通り、月旦評での昇級を目指して必死になって競い合った。それ故に、人間的教育的に望ましくない事象も生じた。

淡窓は、何を意図して月旦評を設けたのであろうか？。その目的は、はっきりしている。それは、①塾生の勉学意欲を刺激する②塾生の勉学に対する勤怠を把握する―などであった。

さらに、教育内容や評価までが、出身や家柄などで差別が普通に行われていた当時の藩校のあり方に対する無言の批判とも解される。そうした意図も読み取れる。

(一)月旦評の由来

月旦は、中国の『後漢書』の「許劭しよたう伝」に見られる言葉で、「人物評」の意味である。淡窓は、それを「学業成績評」へうまく改変したものと考えられる。

こうした『後漢書』の故事が、どのようにして淡窓の知るところとなり、月旦評作成に至ったかは推察の域を出ない。

(二)月旦評の原則

前述の通り、月旦評は、塾生をその身分、年齢、学歴で差別しない平等主義の教育理念の実践。その原則は、平等主義（三奪法）と実力主義である。

三奪法は、古くは中国で禅門の修行僧が入門時に身分、年齢、学歴、即ち俗界における決定的な差別的根柢を奪われたことに由来している。「それは、仏法の下では全ての求道者が平等であるということを知らせしめるために実施された」と言われている。

月旦評において、例外的な扱いが無かったわけではないが、そうした例は極めて少なかった。他塾で学びかなりの学力を持ち、月旦評の出発点である無級に入れたのでは

クラス編成上甚だ不都合という理由で「飛び級」させた例がある。また、問題を起こした塾生を降級させた例も。その数は驚くほど少なく、特例的なものであった。

(三)月旦評の実態

咸宜園では、毎月試業（試験）を実施。それに日々の課業の結果なども加味し、塾生一人ひとりの成績を発表した。その成績評は最下級が無級で、一級―九級で成り、各級が上下に分かれていた。つまり、十級十九段階であった。無論、時代によって月旦評の形態は違っていた。塾生の増加などに伴い様々な改善がなされた。その変遷は、後で述べることとする。

月旦評は、厳密かつ厳格なもので、私情が入る余地など全くなかった。

天保十一（一八四〇）年からは、各級の評価方法が細密化。各級に応じた課業（句読、講読、輪読、会読）と試業（詩・文試験）の点数による進級は、仮進級で「権」の字が付けられた。そして「独見」と呼ばれる面接試験を実施。それに合格して、はじめて「権」の字が消えて本進級に至る者には「真」の字が付された。さらに、特に実力のある者には「真」の字が付された。「真権法」である。

こうした手法は、「真の学力」や「それにふさわしい人格」を見ることが目的であったと考えられる。

(四)月旦評の変遷

月旦評がはじめて作成されたのは、文化二（一八〇五）年八月。淡窓二十四歳。それは、四等級からなる簡単なものであった。最下級が四等級。最上級が一等級。

最初の月旦評には、十五名の名前が見られる。淡窓の塾を成章舎と称した時代のことである。

その後、様々な改変が行われ、天保十（一八三九）年三月、淡窓五十八歳のときに、無級、一級―九級から成る十級十九段階に改められた。無級を除いて各級を上下に区分。「この段階で、月旦評の『骨格』がほぼ固まった」と言えるよう。

(五)月旦評教育の限界

月旦評は、塾生たちを競い合わせ、勉学への意欲を高め精進させるには好都合であった。だが、塾生たちが成績評価を上げることだけに血眼になり、人間修養に努めないなどの弊害が生じた。塾生が、「点取り虫」化してしまった。今日の受験勉強をも連想させる。

くり返す必要もないが、月旦評教育は塾生たちの競争心を掻き立てることに成功したが、困ったこともあった。

門生の「学校は礼儀を教えるところ。塾生の競争心を煽るやり方は、非教育的ではないか」との問いに対して、淡窓は「中国の賢者がそのように言っているが、中国と日本

とでは時代が違っている。中国には科挙の制度があり、庶民でも学力次第で高位高官に就ける。だから競い合う。だが、日本は身分・世襲制度で、能力があっても出世できないから勉学に赴かない。そうであるから、月旦評を作成し榮辱を示して、塾生を鼓舞するのである」と『夜雨寮筆記』（巻二）で答えている。

淡窓は、月旦評教育の限界もよく分かっていた。淡窓四十三歳のときに著した『自新録』の中で、次のように述べている。「月旦評を作りて門人を誘掖する。これ門下の盛んなる所以なり。然れどもまたその弊少なからず。諸生の課程、外を務めて内に廢して、名を取りて実を捨つ。今これを矯めんと欲するも三十年の旧習、遽やかに変ずべからず。須らく善巧方便もてこれを誘い、以て虚名の地を離れて実践の域に入らしむべし。この工夫また容易にあらず」。

今日の学校教育からすると、競争心を煽る教育手法は望ましくない。過度の競争心は、排他的側面を持つ。今日の学校教育の目指すところは「ナンバーワン」の育成ではない。「オンリーワン」の育成である。そのことは自明の理である。

主な参考・引用文献

- 日田郡教育会『増補淡窓全集』（思文閣）
- 井上義巳『広瀬淡窓』（吉川弘文館）
- 海原徹『広瀬淡窓と咸宜園』（ミネルヴァ書房）
- 深町浩一郎『広瀬淡窓』（西日本新聞社）
- 広瀬正雄『広瀬淡窓手ほどき』（広瀬資料館）
- 原千里『広瀬淡窓と明治の教育理念』（西日本新聞社）
- 井上勝生『幕末・維新』（岩波書店）
- 古川薫『松下村塾』（新潮社）